

教職課程
自己点検評価報告書

令和5年3月

東京農業大学生命科学部

目次

I	教職課程の現況及び特色	1
II	基準領域ごとの事例点検評価	3
	基準領域1 教職課程に関わる教職員の共通理解に基づく協働的な取り組み	3
	基準領域2 学生の確保・育成・キャリア支援	5
	基準領域3 適切な教職課程カリキュラム	7
III	「教職課程自己点検評価報告書」作成のプロセス	10
IV	現状基礎データ票	11

I 教職課程の現況及び特色

1 現況

(1) 大学名：東京農業大学 生命科学部

(2) 所在地：東京都世田谷区桜丘 1 - 1 - 1

(3) 学生数及び教員数（令和4年5月1日現在）

学生数：教職課程履修者数 119 名／学部全体 1,707 名

教員数：教職課程科目（教職・教科計）担当 53 名／学部全体 55 名

2 特色

本学部は、多様な生物をミクロからマクロまで統合的に捉えることで、現代社会が直面する問題解決の取り組みに繋がる教育研究を行う。また、その過程を通して汎用的な基礎力と応用力を磨き、知識・技術・経験をもとに自ら問題発見と解決能力を見いだすことに挑戦し、倫理観をもって社会に貢献できる人材を養成する。

本学部を構成する学科と認定されている免許教科は下表のとおりである。

学科	中学校教諭一種免許状	高等学校教諭一種免許状
バイオサイエンス学科	理科	理科・農業
分子生命化学科	理科	理科・農業
分子微生物学科	理科	理科・農業

上記の免許状取得のため教職課程では、教育意欲に溢れ、理科及び農業に関する専門知識を持ち、学校現場に対応できる実践的指導力を身につけた教員の養成を、全学的な協力・指導体制のもと各学科で行っている。

各学科の教職課程の理念等

○バイオサイエンス学科

本学科では、分子生物学に関する講義、最先端技術を用いた研究を通じて、基礎生物学全般から農学とその応用までを理解させ、確かなプレゼンテーション力と論理的思考を兼ね備えた教員の育成に努めている。加えて、教員としての自覚を持ち、意義を理解したうえで、積極的に生徒の指導の役割を果たす魅力ある人材の育成を目的とする。

○分子生命化学科

本学科では、農学、生命科学領域の基盤となる化学を中心とする自然科学を総合的に理解し、様々な自然・生命現象に対して、分子論的な解釈と化学的なアプローチを行うことのできるよう教育を実践し、理科及び農業に関する専門知識と授業実践力など、教員として質の高い職務遂行能力を有する教員を育成することを目的とする。

○分子微生物学科

本学科では、微生物の研究を進めるために必要な分子生物学や環境、動植物に関連する科目を開講しており、基礎的な生物学全般から応用に至るまでを学び、農学に精通した分

野での教育者の育成に努めている。また、研究室での専攻科目や研究生活を通じて論理的思考力、プレゼンテーション能力及びコミュニケーション能力の育成に努めており、生徒の指導に熱意を持って注力できる人材の育成を目的とする。

II 基準領域ごとの教職課程自己点検評価

■基準領域1 教職課程に関わる教職員の共通理解に基づく協働的な取り組み

[現状説明]

(1) 基準項目1-1 教職課程教育の目的・目標の共有

初代学長横井時敬による本学の建学の精神「人物を畑に還す」との言葉どおり、本学は開学以来全国から若者を集め、地域に貢献する人物となるよう教育してきた。教員養成においても同様で、課程履修学生が卒業後に全国各地で教育者として活躍することを目標とし、この東京農大精神と教育理念「実学主義」のもと、豊かで実践的な知識と技能を身につけた心身ともに健全な教員の養成を目指している。今日、生命科学は進歩が速く、農学や環境科学には社会からの期待が大きい。教職課程ではこのような動向を踏まえ、学部段階では学科の基礎と教員としての基本的かつ実践的な知識と技術を習得させる教育を行う。

以上のような教職課程の教育の目的・目標を学科及び取得できる免許教科ごとに、大学のホームページにて情報公開するとともに、学生には「学生生活ハンドブック」やガイダンスで周知するとともに、関係教職員には学科等教員会において共有を図っている。

<根拠となる資料・データ等>

- 1-1-1 東京農業大学 HP「教職課程に関する情報公開」
(<https://www.nodai.ac.jp/academics/edu/disclosure/>)
- 1-1-2 学生生活ハンドブック2022
(<https://www.nodai.ac.jp/campus/e-books/HB/>)
- 1-1-3 2022年度教職課程ガイダンス資料

(2) 基準項目1-2 教職課程に関する組織的工夫

本学では、全学的に教職課程を運営する組織として、教職・学術情報課程主任（以下 課程主任）、教職課程所属の教員（以下 課程教員）、6学部23学科のうち、各学科から選出された教員各1名、教職・学術情報課程教員、事務局長、教務支援部長、幹事3名（3キャンパスの教職・学術情報課程業務担当課長各1名）から構成される教職・学術情報課程委員会を設置している。委員会は年2回行い、課程履修学生に対する教育及びカリキュラム編成に関する事項について、各学科と課程との連携調整を図ることを目的としている。また、必要に応じて教職課程委員会（部門連絡会）を開催し、特定学科に関連する連絡調整を行っている。本学部からも各学科1名が委員に選出され、教職課程の運営を担っている。

教職課程では、教育研究に関する事項を審議することを目的として、課程主任、課程所属の教授、教務支援部長で構成される教職課程教授会を必要に応じて開催している。その他に世田谷キャンパスでは課程主任、課程教員で構成される課程教員会を毎月開催し、課程の運営について審議、調整を行っている。

世田谷キャンパスの教職課程の運営は、課程主任のもと、課程教員が担当学科の課程履修学生の担任となり、教務課と役割分担で連携を密に行い、協働体制で行っている。また、

課程履修学生に対する指導は、教職に関する科目及び教育実習視察は課程教員が原則行い、教科に関する科目は学科教員が行う。学科教員による研究室でのキャリア教育など全学的な対応を行う中で、教職課程と学部間の協働による教育体制が図られている。また、毎年度発行する「東京農業大学教職課程 Annual Report」や本大学ホームページにおいて教職課程の取り組みなどに関する情報公開を行っている。

本学では、教育の資質向上を図る FD 活動の 1 つとして、学期末に授業評価アンケートを各授業の履修対象者全員に実施することで授業の改善を図るとともに、評価の高かった教員をベストレクチャー賞及びベストティーチャー賞で表彰し、その講義を見学する機会を設けている。また、バイオサイエンス学科では年に 1 度、学科教員と非常勤講師（教職課程の非常勤講師を含む）との意見交換会を実施することで、教職課程と学科間の連続性を強化している。

<根拠となる資料・データ等>

- 1-2-1 東京農業大学教職・学術情報課程委員会細則
- 1-2-2 東京農業大学教職課程 Annual Report 令和 4 年度版
(<https://www.nodai.ac.jp/news/article/2annual-report-1/>)
- 1-2-3 東京農業大学 HP「教職課程に関する情報公開」
(<https://www.nodai.ac.jp/academics/edu/disclosure/>)

[長所・特色]

教職課程 FD・SD、教職課程 Annual Report 発行、部門連絡会、課程教員と教務課による情報交換・検討など課程履修学生に対する指導や個別対応を連携して行う全学的対応・体制・環境を整えている。

[取り組み上の課題]

教職課程の運営に関して、課程教員と学科教員との連携が課題である。社会性や道徳性、教科や学科の専門性といった教員の資質の向上に向けて、課程教員と学科教員は協働体制で課程履修学生に対する教育する体制を、さらに強化する必要がある。また、学科の課題として、学科教員と非常勤講師との意見交換会がコロナ禍で中断していたため、対面・オンラインいずれかで再開する予定である。また、各学科は教職課程の連携を強化し、教員間で相互点検を行う仕組みを整備することで組織的な改善と支援の向上に努めることとしている。

■基準領域 2 学生の確保・指導・キャリア支援

[現状説明]

(1) 基準項目 2-1 教職を担うべき適切な人材（学生）の確保・育成

基準項目 1-1 で示した各学科が目指す教員像に向け、1年次のガイダンスを通じて教職課程を学ぶにふさわしい学生像を周知している。教職課程では2年次に「履修カルテ」を配付し、課程履修学生は教育実習指導を通じて課程教員と面談を行い、履修カルテに記録することで学課題確認を行っている。また、3年次には「理想の教師像」、「学校研究」など教員に求められる資質・意欲・関心を確認するレポートを提出する機会を設けている。なお、本学では3年生修了時点までに、教職概論、教育原理、教育課程論、教育心理学、生徒進路指導論の単位を修得することを教育実習派遣要件に定め、教職課程の基礎を習得した学生を教育実習に派遣することとしている。また、学部では理科免許状と農業免許状のコースを設け、学士プログラムの中に両免許の授業科目を配置していることを規程に定め、学科ごとの履修モデルを体系的に学習することにより理科・農業の教員を養成する。

<根拠となる資料・データ等>

2-1-1 履修カルテ

2-1-2 教職課程履修案内 2022

(2) 基準項目 2-2 教職へのキャリア支援

本学部は各学科が担任制を導入し、学科担任が学生のキャリア支援をしている。3年次以降は全学生が研究室に所属するため、研究室において学生のニーズや適性を把握してキャリア支援を組織的に行っている。学科のキャリア支援として、バイオサイエンス学科では、学科設立時よりOBOG会を組織しており、そのOBOG会主催の就職支援セミナーを毎年、学部3年生を対象に開催している。教職に就いた卒業生を含む5~10名のOBOGに講師をお願いして、キャリア支援を行っている。本学部では大学院進学者が多く、大学院進学後のキャリアとして新たに教職を希望する学生が生じる。その際は、大学院博士前期課程の1年次より、教職課程の科目等履修生として教職の道が拓けることを指導している。課程履修学生が早い段階から教育現場を体験するためにも、東京都、埼玉県などの教育委員会による教育ボランティア説明会を実施し、学生の積極的なボランティア活動への参加を推進している。さらに個別面談等を通じて、自己評価・学習達成度及課題の確認と補完をしながら、次年度の教職課程履修に向けた心構え及び教員としての資質を考えさせる機会を設けるといったキャリア発達の促進を促している。

教職課程では3年次の夏から4年次の夏まで30回の教員採用試験対策講座を企画し、教員養成の充実を図っている。また、外部講師によるキャリア講演、中学校の授業見学、教育委員会との連携による教員採用試験に合格した学生を対象とした現地演習を企画するなど教育実習では学べない授業以外の教員の経験を積ませている。

<根拠となる資料・データ等>

2-2-1 2022年度学部・学科・課程紹介

2-2-2 東京農業大学教職課程 Annual Report 令和4年度

(<https://www.nodai.ac.jp/news/article/2annual-report-1/>)

[長所・特色]

各学科では、個別面談を通じて学生1人1人のキャリア発達を支援し、本人の特性に応じたキャリアを教員とともに考え、支える場を設けている。

[取り組み上の課題]

質保証・向上を目的とした課程履修学生の評価基準の設定が課題である。学生が受講にあたり、最低限の知識・技能を有しているかの確認、教員としての質を担保するために履修条件としての評価基準を定めることである。現在、各学年に対して評価基準を設定することを検討している。また、分子生命化学科、分子微生物学科は開設間もないこともあるため、今後はOBOG会を発足し、教員の職に就いたOBOGからキャリア支援等を計画している。

■基準領域3 適切な教職課程カリキュラム

[現状説明]

(1) 基準項目3-1 教職課程カリキュラムの編成・実施

研究室における実験を中心とする諸活動と学会発表のような体験的・実践的な活動及び卒論研究を通じた問題の発見とその解決方法を見出す訓練を行っている。学生の研究においては ICT 機器を活用して情報活用能力を育成している。

○バイオサイエンス学科

本学科では「カリキュラム・ポリシー」に基づき、教員を目指す学生の履修モデルを提示しており、教職を目指す能力育成の観点から、順次性・体系性を確保している。1年次前学期には、「化学」「無機化学」「有機化学」「生物」「物理」「地学」の高等学校理科で扱う範囲を包括する講義や「農学概論」を通じて基礎を養い、1年次後学期には「生物有機化学」「生物物理化学」により理解を深める。2年次には「分子生物学(一)・(二)」をはじめとする専門分野を座学で学ぶことに加え、「無機化学実験」「有機化学実験」「微生物学実験」「基礎生物学実験(一)」「生化学実験」と1年間を通じて実験実習を実施し、観察・実験による探究心を育成している。3年次より研究室に配属し、「バイオサイエンス基礎実験」「バイオサイエンス応用実験」を通じて卒業研究に向けた基盤技術を学ぶ。4年次では、4年間の集大成として「卒業研究」とこれに関連する「科学論文作成法」「生命科学プレゼンテーション法」を行うことで、課題解決能力を養う総仕上げとしている。ここでは研究計画の立案・スケジュール管理・実験・考察・プレゼンテーションなど、教育現場に必要な基本的スキルを養う。4年次の最後には ICT 機器を利用した公開プレゼンテーションを実施し、質疑応答までを卒業試験としている。さらに各研究室から2名の優秀発表者を選抜し、全学科教員と学生を前に発表会を行うことで、学生の修学意欲の向上を試みている。

○分子生命化学科

本学科では「化学」「生物学」「物理学」「地学」の学科基礎科目を1年次に、「生体有機化学」「物理化学」「生化学」「農業と化学」等の学科専門科目の講義を3年次までに学習し、農学、生命科学に関する基礎的な知識及び物理学、地学など他の理科的基礎知識を修得している。また、1年次に「農場実習」「基礎及び有機化学実験」、2年次に「分析化学実験」「有機合成化学実験」「高分子化学実験」「天然物化学実験」を実施し、基本的な理化学実験手法、農業手法に加え実験室における安全対策を能動的に学習する。3年次より研究室に配属し、「応用分子生命化学実験」から卒業研究の基礎技術を学習し、また4年次には「卒業研究」及びそれに関連する「分子生命化学論文購読(一)(二)」、「分子生命化学プレゼンテーション法(一)(二)」を実施し、課題解決能力に加え教育現場で必要とされる表現力、ファシリテーション能力を育成している。

○分子微生物学科

本学科では、以下のとおり教職課程カリキュラムを編成・実施している。1年次には「生物学」「化学」「無機・有機化学」「物理学」「地学」「農学概論」を通じ基礎を養い、1年次

後期には「分析化学実験」「基礎科学実験」を通じて実験を行う為の基礎を育成している。また、1年次後学期から2年次前学期にかけ「微生物学(一)・(二)」を設定し、微生物に関する素養を育成している。2年次には「分子生物学(一)・(二)」「生物環境科学」「動物生理学」「植物生理学」「バイオインフォマティクス」といった微生物以外の専門分野を座学で学び、「微生物学実験」「生物化学実験」「分子生物学実験」を通じて、3年次の研究室配属までにひと通りの基礎的な実験手技の素養を育成している。3年次には各研究室に設定された研究室専攻科目や「英語論文購読」を通じて、それぞれの分野での卒業研究に向けた研究技術及び科学英語の素養や文献調査能力を育成している。4年次では4年間の集大成である「卒業論文」に向けて、「プレゼンテーション演習」「分子微生物学特別実験」を通じて総仕上げとしている。研究計画のスケジュール管理能力や得られた結果から、ディスカッションを通じて課題解決能力を養うことで、教育現場でも役立つスキル育成を行う。4年次最後には各研究室から優秀発表者を選抜し、学科全教員の前で発表会・表彰を行い、学生の研究に対するモチベーション向上を試みている。教職課程では、教職課程の質的水準に寄与するコアカリキュラムを履修カルテ)の内容を踏まえて、系統的・体系的なカリキュラムとなるよう編成している。授業はシラバスに基づいて到達目標の達成ができるように設計し、学科内の教務委員会でシラバスの内容をチェックする。課程履修学生には、コアカリキュラム及び教員等育成指標の内容を踏まえて、1年生の段階から教員としての資質を見極める機会や体験を提供し、学び続ける教員像の確立、実践的指導力の育成を意識して様々な取り組みを実施している。

<根拠となる資料・データ等>

- 3-1-1 2022年度学部・学科・課程紹介
- 3-1-2 履修カルテ
- 3-1-3 教職課程履修案内2022

(2) 基準項目 3-2 実践的指導力養成と地域との連携

各学科では、実践的指導力の養成として、学科専門科目知識から基礎的な知識を学習し、実験実習及び卒業論文を通じて、教科に関する専門的な知識やスキルを習得させている。また、教職課程において学習指導案作成の指導、大学行事として学内避難訓練を通じた防災教育、救命講習を実施している。さらに地域行事や災害時における地域へのサポート、小中学校での教育ボランティアなど地域の教育委員会と連携協力体制が構築されている。その他に近隣の高等学校と高大連携事業を行っている。

<根拠となる資料・データ等>

- 3-2-1 2022年度学部・学科・課程紹介
- 3-2-2 免許状更新講習テキスト
- 3-3-3 教育ボランティア説明会資料

[長所・特色]

各学科では、学科毎の専門性の知識や技術を、実験実習科目を通じて習得し、3年次からは研究室活動を通じてより高度な専門性を身につけている。また、教育ボランティア活動を通じて、教育現場における実践力の養成にも力を入れている。

[取り組み上の課題]

ICT教育の実践的指導力と活用の強化が課題である。学校教育現場でICT教育の充実化が目指されていることを鑑み、ICTのスキルを身につけるにとどまらず、ICTを活用した効果的な授業の在り方、学校不適応や特別支援教育が必要な生徒へのICTの活用、校務・セキュリティへの活用などを含めた情報の力の向上を目指すこととその支援体制・環境の強化のため、一層、教育の充実を図る必要がある。

分子生命化学科、分子微生物学科では教員免許取得を目指す学生に対して、これまで履修モデルを周知していなかったため、次年度以降はバイオサイエンス学科と同様に教職に履修モデルを周知し、教職を目指す学生に必要な素養を育成する。

Ⅲ 「教職課程自己点検評価報告書」作成のプロセス

本学教職課程の全学的組織である教職・学術情報課程委員会において、自己点検評価の実施及び報告書作成までの手順・スケジュールを検討し、以下の作成プロセスを策定した。なお、本プロセスは、大学設置基準に基づく全学自己点検評価委員会とも情報共有し、常に点検及び見直しを行う。

第1プロセス（令和4年5月）

教職・学術情報課程委員会による自己点検評価の実施内容等の決定



第2プロセス（令和4年6月）

教職課程、担当事務所管（教務課・学生教務課）による法令由来事項の点検等の実施



第3プロセス（令和4年6月）

学部教職課程委員会と学科による自己点検・評価の手順等の確認



第4プロセス（令和4年7月～11月）

自己点検評価の実施



第5プロセス（令和4年12月）

教職・学術情報課程委員会による自己点検・評価報告書の承認



第6プロセス（令和5年2月）

自己点検評価報告書の公表



第7プロセス（令和5年3月）

自己点検評価報告書によるアクション・プランへの反映

IV 現状基礎データ票

令和4年5月1日現在

設置者：学校法人東京農業大学					
大学・学部名称：東京農業大学・生命科学部					
学科の名称：バイオサイエンス学科、分子生命化学科、分子微生物学科					
1 卒業者数、教員免許取得者数、教員採用者数等					
① 昨年度卒業者数					405 人
② ①のうち、就職者数 (企業、公務員等を含む)					248 人
③ ①のうち、教員免許取得者の実数 (複数免許取得者も1と数える)					26 人
④ ②のうち、教職に就いた者の数 (正規採用+臨時的任用の合計数)					6 人
④のうち、正規採用者数					3 人
④のうち、臨時的任用者数					3 人
2 教員組織					
職階	教授	准教授	講師	助教	その他 ()
教員数	24 人	17 人	0 人	14 人	